

# 新書紹介

## 生きるための道具づくり

光野有次著

晶文社 四六版 三三四頁 一、八〇〇円

この人のことはアエラという

週刊誌で初めて知った。「現代の肖像」という五ページほどのなげない記事だったが、口髭をはやして丸いメガネをかけた中年男の存在というものが、やけに心にひっかかっていた。

そこでは光野有次氏が大企業を辞めて重症心身障害児施設に飛び込み、「寝たきりの子」を起こし続ける援助器具デザイナーとして紹介されていた。

「うちは修道者のこちこち人間ばかり、自由なんてないですよ。本当は給料が欲しいのでしょ」という施設の人の問いに、「安心して働ける場は欲しい」と認める光野氏は、既製のりハビリ機器についてはこう答

えていた。

「例えば階段の昇降練習台。ただ昇っては降りるだけ、あれじゃ子供はりハビリを嫌がります。これを昇ったら滑り台で降りるようにすれば、喜んで訓練に励む。こういう例がいっぱいあるとです」

そして、「一度、重度の子とじっくり付き合ってみたかった。ハンディを持った人たちの生活道具を作るというのに、例えば便器を使うとうんちをしているところを知らんのですから」と考えた光野氏は、スウェーデンのハンディキャップ問題専門家も驚かす掘りゴツツ式トイレなどを長崎県の山の中にある施設に作ってしまうのだ。

これはいままで介助者の手を借りてしか排泄行為ができなかった障害者にとっては画期的なトイレだった。ないがしろにされやすい彼らのプライバシーが、このトイレの出現で守れることとなる。土足で床を歩く西欧人には、この発想はとも斬新にみえるらしく、ストックホルムの援助器具センターはスウェーデン人を日本に修業に行かせるとまで言い出すのだ。

「生きるための道具づくり」は、光野氏が東京から田舎の施設に移り、そこでの人とのかい、悪戦苦闘ぶりが、なめらかでやわらかな筆で書かれている。

なかでも印象に残ったのは、光野氏は園生百七十人ほどの一人ひとりの体に合わせた椅子を作るのだが、それが椅子を作るのではなく、座位を取らせる道具を作るという考えでやっていることだった。

人間の体は一代でも寝たきりの身体をつくってしまい、ベッドで寝たきりのまま子供から大人に育った人は、薄く固くなった胸や、下肢、頭、腕には共通

の変形や拘縮があらわれてしまうそう。寝たきりの状態に体のほうが適応をおこしてしまうらしい。もちろん精神的にも悪影響を及ぼさなはずがない。光野氏の作り出すそれぞれの体にあわせた椅子が、いかに偉大な器具で、彼ら一人ひとりとつても、どれほど人生を変革させてくれた存在かは、はかりしれない。

やがて光野氏は活動を施設から地域へと広げる。重度障害者がまるで収容され、社会から奇異にうつっていることを憂いパン屋をひらくのだ。それは地域にとつて彼らが「知らない人」から「知っている人」へとうつる実践の場でもあった。

光野氏はあとがきの中で「仕事」という言葉が好きだと述べている。そして、この本ではハンディキャップをキーワードにして「仕事」と「暮らし」のことを書きたかったと、胸のうちを吐露している。やや内輪話に傾いた本書が、それが成功したかどうかはわからない。

光野氏の母親は雑誌の中で彼のことをこう評していた。

「主人はお医者になって欲しかったのですが、高校生の時にこんなことがありました。三十羽ほどの小鳥を飼っていたのですが、羽虫でばたばたと死にましてね。それを見た有次がわんわん泣きました。私たちがびっくりするくらい。『ぼくは生き物が死ぬのを見るのがつらい』って。心底やさしい子でした。その時、『父さんがなんと言おうと医学部なんていかない』って言いました、主人も何も言わなくなりました」

私はイマジネーションが豊かな人に会うのが好きだ。イマジネーションは行動の起爆力になるからだ。この本を読み終えたあと、彼と彼の創り出した器具に会ってみたくてしようがなくなっていた。

〈戸塚区 笹目孝夫〉